



## 大津の幼稚園と京都精華大生 共同作成

# 漢字絵本で 幼児教育



出来上がった漢字絵本。「王様は行列の用意をさせ」というように、振り仮名のない漢字が並ぶ。

「この漢字は何で読む?」。幼稚園の先生がカードを指さして園児たちに尋ねると、元気のいい声が響き渡る。出された問題は「直前に音読した一鬼と龍」や「赤頭巾ちゃん」といった昔話の絵本に出きた漢字。絵本は特別に作られたもので、斬新なイラストが描かれているほか、振り仮名のない常用漢字が使われている。



①漢字絵本と筆字カードを使って学習する園児たち(大津市天寺の聖パウロ学園)  
②漢字絵本を贈る京大生(京都府)  
③「レイト」を担いだ田中さん(京都市立区の京精華大)

## 振り仮名なし■繰り返し読み吸収

「漢字を読む力だけじゃ、考え方も伸びず」ができる。大津市三大寺にある聖パウロ学園・湖田京幼稚園では、田中好三理恵(1)の方針で、京都精華大(京都市左京区)の漢字絵本を作成。幼児教育に生かす。

漢字絵本を用いた授業は、年少から年長まで、そのクラスで行われており、園児たちは先生と一緒に自分の手元にある絵本を音読する。振り仮名が付いていなくてもすらすら、カードに書かれた「龍」や「競争」といった漢字の読み方もあった。

種別は、京都市東大デザイン部の角谷和講師(ラブックデザイン)で、学生1人が1冊ずつ担当。文字の大きさや位置などのレイアウトも他の学生が全て受け持ち、2012年度から毎年10冊ずつ、14年7月までに30冊を作成した。

オリジナル20冊以上ある絵本の種別は、学生の個性を反映。幼稚園(園児)と絵本のイメージを相談しながら作業を進めたが、「三匹の子豚」を担当した学生は、「オカミが捕獲できる」と言われ、何度も描き直したという。角谷は相手の要望を聞きながら、手前練は、大学の経験ではできなかった。プロを目指す上での良い経験になったのではと振り返る。

「レイト」を担当した田中さんは4年の田中詩織さん(22)は「レイト」や「分」がわかりやすいかな」と考えながら字を入れました。実際にはすでにちに読まれていると思っていた「レイト」を白黒細めた。

絵本を繰り返し読むことで文章を覚え、使用されている漢字も自分のものにしていく。「一見大暗記のようですが、語彙が増え、さらば考える力も身に付いている。田中理事は「言葉を覚えるに早過ぎる」といってはいる。幼児期に多くの言葉に触れれば、その後、能力を発達させる上でも重要な経験になる」と話している。